全国小学校英語教育実践研究会 令和２年度　「わたしの英語教育実践」	第６学年　外国語科（６月） New Horizon Elementary　6　（東京書籍） Unit1 This is me!　（単元を通して）
⑥その他（「一人も置いていかない指導」を目指して）	岐阜市立長良東小学校　　教諭　武部八重子

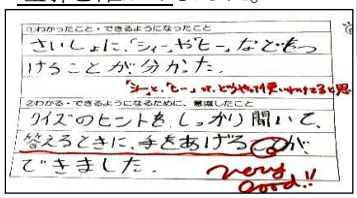
コロナ禍の臨時休業中，家庭学習の見届けから気付いたこと

４,５月の臨時休校中，プリント課題を作成し，教科書の QR コードを活用しながら，「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語習得の順序にできるだけ近い形で家庭学習を行えるようにしました。その見届けを行う中で，これまで以上に「『真面目にやっているようで実は困っている子』『困っているのに言い出せずにいる子』など，児童一人一人の実態を把握し，それに基づく指導改善を行うこと」の大切さに気付きました。また，対面授業再開後も，コロナ禍のため Small Talk は行わず，代わりに，振り返りの記述から把握した児童の興味・関心や疑問に基づく Interactive Teacher Talk を行うことで，**「単位時間をつなぐ，連続性のある学び」の具現**に注力することとしました。

児童一人一人の振り返りの記述を基にした指導改善の実践事例

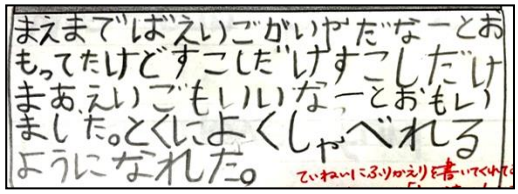
実践事例①　小学校段階における正確さの指導

前年度の未指導内容「三人称単数の人称代名詞」を用いてヒントクイズを行った際，振り返りの記述から，大部分の児童が he と she の使い分けに気付くことができたものの，「最初にシィーやヒーなどをつけることが分かった」「シーとヒーのちがいが今ひとつ分からない」など，一部の児童の理解が不十分であることが分かりました。そこで次時，イラストを用いて，“Do you know about this boy? Who is he? Yes, he is *Katsuo*. Then, how about this girl? Who is she? Yes, she is *Wakame*.”などと児童（学級全体）とやり取りする中で再度気付きを促す暗示的指導を行いました。「今ひとつ分からない」と記述していた児童の表情から，その違いに気付いたことを見届けた上で意図的に指名し，気付いたことを発表できるようにすることでその理解を確かめました。



実践事例②　具体的な個別の支援

英語に苦手意識を持つ児童にとって，「分からないところがあっても分かるところを手掛かりに聞き続ける」ということは難しいことです。ある日の振り返りに，「何を言っているか分からないから面白くない」と書いた児童がいました。その記述への返信として，困り感を受け止めながら，「全てを理解しようとせず，聞き取れた言葉をもとに，『～と言っているのかな』などと考えながら聞くとよい」という助言を書くとともに，次の時間の「聞くこと」の言語活動にて，当該児童とアイコンタクトをとり，その理解を確かめながら全体とのやり取りを行いました。また，授業後に当該児童に声をかけ，本時の理解度について確かめるとともに，助言を受けて聞き続けようと努力したことについて認め励ましました。こうした営みを継続して行ったところ，単元終末の振り返りに以下のような記述の変容がありました。



武部教諭の実践から、私は今、「授業とは何か」と改めて考えています。そのタイトルにある通り、「一人も置いていかない指導」です。鞄にいろいろな思いを詰め込んで登校して来る子供たち。登校さえ、しんどい子供もいます。本来なら、エネルギーをいっぱい入れた鞄を持ってきた子供達は、学校で友達と授業を受け、遊びながらそのエネルギーを放出し、また家庭でエネルギーを蓄えて翌日登校してくるのですが、それが当たり前でなくなってきている現状が少なからずあります。授業を通して子供たちが自分の可能性を拓き、自分が生まれてきたこと、そこにいることに喜びを感じるよう働きかけ、生きる力を付けることが、私たち教師の役割だと思います。本実践は、外国語授業だけのことではありません。どの子供も置いていかないという、教師魂に触れ、私も自分が置かれたところで精一杯自身の役割を果たしたいと、改めて強く思います。

（文部科学省　視学官　直山　木綿子）